
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第115集

宮台遺跡 (第2次)

2010.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第115集

みや だい い せき
宮 台 遺 跡 (第2次)

2010.3

深谷市教育委員会

例 言

1. 本書は、埼玉県深谷市黒田字下北原827番地外における交差点改良及び歩道橋設置工事に伴う遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、花園町遺跡調査会が主体となり、現地費用については埼玉県熊谷土木事務所が負担し、整理報告書刊行に関しては深谷市が負担した。
3. 本書の編集は、村松篤が行った。
4. 発掘調査期間は、平成3年10月8日～11月11日である。
5. 出土遺物は、深谷市教育委員会が保管している。

発掘調査組織

発掘調査・整理作業（平成3年度）

調査主体者	花園町遺跡調査会	会 長	新井 朝次	(花園町教育委員会教育長)
		副会長	坂本 正雄	(花園町教育委員会教育次長)
		専門員	森下昌市郎	(花園町教育委員会社会教育課)
		庶 務	横川 均	(花園町教育委員会次長補佐)
			戸塚勢津子	(花園町教育委員会学務係長)

報告書刊行（平成21年度）

調査主体者	深谷市教育委員会	教 育 長	猪野 幸男
		教育次長	石田 文雄
		次 長	島崎 保
事務局	生涯学習課	課 長	澤出 晃越
		課長補佐	吉場 厚仁
	文化財保護係長		村松 篤
		主 査	宮本 直樹
		主 任	荻野 直美
		主 任	知久 裕昭
		主 事	幾島 審
		主 事 補	飯島 峻輔

目 次

例 言	
発掘調査の組織	
目 次	
I 発掘調査に至る経緯と経過	1
II 周辺の遺跡	1
III 遺構と遺物	1
1 概要	1
2 縄文時代の遺物	1
IV 調査のまとめ	2
報告書抄録	15

挿図目次

第1図 宮台遺跡周辺の遺跡	5	第3図 出土石器	7
第2図 出土土器	6		

挿表目次

第1表 出土遺物観察表	3
-------------	---

図版目次

図版1 (遺構)	西区発掘調査風景、西区発掘調査風景
図版2 (遺構)	包含層、埋甕
図版3 (遺物)	出土土器
図版4 (遺物)	出土土器・石器

I 発掘調査に至る経緯と経過

平成3年8月に、国道140号線の道路改良工事（歩道橋架橋）に伴う埋蔵文化財の照会があった。当時の花園町教委は現地踏査をした結果、「宮台遺跡(66-40)」に工事予定地が該当することを確認した。周辺での過去の調査事例からみて、工事前に記録保存のための発掘調査が必要と判断して、埼玉県熊谷土木事務所に回答した。調査主体は花園町遺跡調査会として、平成3年10月8日に委託契約書を締結して発掘調査を行った。工事に対する指示通知は、平成3年10月17日付委保第3の231号である。発掘調査に関する届は、平成12年12月17日付教文5-1797号である。

調査は、140号バイパスを挟んで東側調査区と西側調査区に分けて呼称した。それぞれ30㎡の調査面積で、合計60㎡を調査した。調査は東側調査区から開始し、後に西側調査区を調査した。両地点とも人力で表土をはぎ、黒褐色土の包含層を地山である砂礫層まで調査した。

II 周辺の遺跡

深谷市黒田に位置する宮台遺跡は、秩父山地に派生した荒川が寄居町付近で流れを東に変え、関東平野に流れ込んだ付近に位置している。遺跡が立地する台地は、荒川により形成された扇状地である柳挽台地であり、遺跡は荒川からみた二段目の河岸段丘に位置している。遺跡付近の標高は、約74mを測り、南東方向に傾斜している。

周辺には縄文時代の遺跡が多く分布しており、国道140号バイパスの建設に伴う昭和50年代の調査では、東から深谷市宮林遺跡、下南原遺跡、台耕地遺跡、上南原遺跡、寄居町北塚屋遺跡が連続して発掘されており、前期から中期にかけての遺跡が検出されている。特に縄文中期に関しては、大型の環状集落である台耕地遺跡、北塚屋遺跡は、荒川中流域の拠点集落として縄文時代中期の

集落研究において重要な位置を占める調査事例である。なお、今回の発掘調査区に挟まれたバイパスの調査は下南原遺跡1次調査として行われた。

III 遺構と遺物

1 概要

今回の調査では縄文時代の包含層が確認された。東側調査区は包含層が薄く、土器小片が出土しただけであった。西側調査区の包含層からは、縄文時代中期の土器や石器が出土したが、攪乱がひどく明瞭な遺構等の確認は困難であったが、埋甕が1基検出された。また、遺物はほとんどが縄文時代中期の土器、石器、礫でありバイパス建設時に確認された中期の集落の広がりと思われる。

埋甕は、第2図7を用いたもので、胴部下半の残存である。掘り方は明瞭ではなかったが、周辺に黒褐色土が分布する。

2 縄文時代の遺物

第2図2、13は勝坂式土器である。4～5は、加曾利E式土器で口縁部破片である。6は、口唇部や口縁部文様帯に円形刺突文が施文される点や胴部文様帯が集合線紋による波状文が施され、この地域における独特の文様構成を見せている。7～9、11、14～16はいわゆる連弧文式土器である。7は埋甕に用いられていた深鉢の胴部下半で、内面が被熱によると考えられる荒れが見られる。1はバケツ状の大形の深鉢で埼玉県北部地域に良く見られる唐草文系土器であり、口縁部は無文となる。17・18は中期後半の土器の底部破片であり、底面に網代痕を残している。

第3図は石器で、図示できたものは18点ある。19～32は打製石斧で、33～34は礫器、35は磨石、36は敲石である。打製石斧は破損品が多く、調整加工が粗い。

IV 調査のまとめ

ここまで述べてきた通り、今回の調査では縄文時代中期の遺物包含層が確認された。出土遺物の大半は縄文時代中期後半のものである。東側の調査区には包含層の広がりがあり見られず、今回検出されたのは主に西側の調査区である。

出土遺物からみると、遺構覆土に含まれるような大形破片等も多くみられる。また、埋甕は住居跡の炉体土器と推定され、プランは明瞭ではないが、本来は住居跡があったものと推定される。バイパス建設時に調査された下南原遺跡1次調査の遺構の広がりであると推定される。宮台遺跡周辺では遺構密度はまばらであるが、下南原下遺跡でも見られるように、遺物が集中する範囲が遺構の範囲として捉えることができるようであり、調査時の注意が必要である。地形からみても下南原遺跡、宮台遺跡、下南原下遺跡は一体の遺跡と考えられ、今後遺跡範囲の見直しが必要になるものと

考えられる。

花園地域の縄文時代遺跡の調査は、国道140号バイパスの建設に伴う発掘調査により、宮林遺跡、台耕地遺跡、北塚屋遺跡の調査などで、草創期、早期、前期、中期の各時代の遺跡が発見されている。昭和50年代の関東地方を代表する発掘調査事例として、また縄文時代研究の最先進地域として、多くの論考などで取り上げられてきた。今回報告資料は、当時の町教育委員会で行われた部分的な調査であるが、これまでの花園地域の輝かしい縄文研究を補っていくものとして、周辺調査の成果が今後重要となっていくものと考えられる。

最後に改めて、この発掘調査にご協力を頂いた方々をはじめ、発掘作業、整理作業に携わり、本調査を支えていただいた皆様に敬意を表したい。

〈参考文献〉

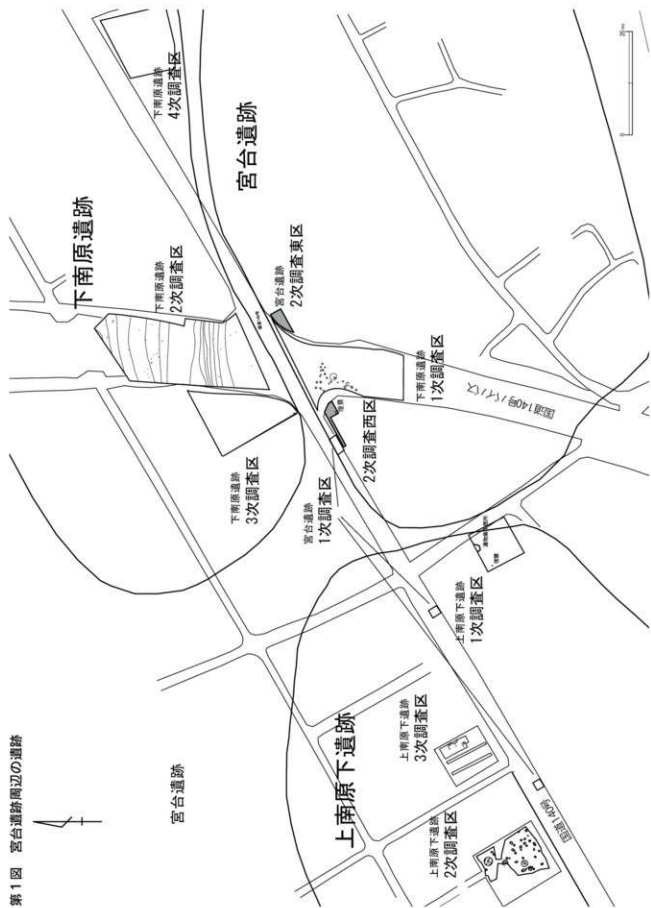
- 1983 『下南原』埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第8集
- 1985 『大林Ⅰ・Ⅱ、宮林、下南原』埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第50集
- 1993 『宮台遺跡』花園町遺跡調査会発掘調査報告書第2集
- 1996 『上南原下遺跡、下南原東遺跡』花園町教育委員会文化財調査報告2
- 1999 『下南原下遺跡』花園町遺跡調査会発掘調査報告書第4集
- 2005 『下南原下遺跡』花園町遺跡調査会発掘調査報告書第10集

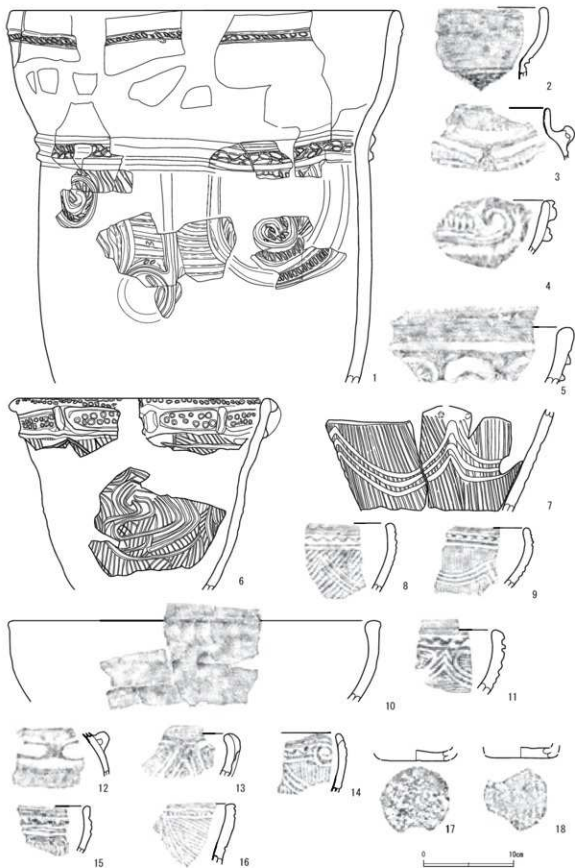
第1表 出土遺物観察表

遺物 No	遺物大別	遺物類別	遺存状況	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	説明	色調	焼成	胎土
1	土器	縄文時代 中期後半	胴部上半 1/9	44.0	41.5		深鉢、内湾する無文の口縁下に刻みを有する隆帯が廻らされる。屈曲する頸部に二条の隆帯が廻り、隆帯間に矢羽模様に刺突が施される。胴部には二条単位の渦巻き文を配する。隆帯間には短沈線を施す。	茶褐色	良好	白色粒
2	土器	縄文時代 中期後半	口縁部				深鉢、内湾する無文の口縁部下に交互刺突文を配する。刻みを有する隆帯が廻らされる。屈曲する頸部に二条の隆帯が廻り、隆帯間に矢羽模様に刺突が施される。胴部には二条単位の渦巻き文を配する。隆帯間には短沈線を施す。	灰褐色	良好	輝石
3	土器	縄文時代 中期後半	口縁部				壺、丸味を有する胴部から短い口縁が立ち上がる。頸部には二条の隆帯が廻り小さな楕状把手が配される。	茶褐色	良好	石英、 白色粒
4	土器	縄文時代 中期後半	口縁部				深鉢、口縁下に隆帯による渦巻文を廻らし口縁区画は縦位の短沈線が充填される。胴部には縄文施文される。	黒褐色	良好	輝石
5	土器	縄文時代 中期後半	口縁部				深鉢、口縁下に無文帯を残し、隆帯により渦巻き文を施す	茶褐色	良好	白色粒
6	土器	縄文時代 中期後半	胴部上半 1/6	30.0	21.2		深鉢、直線的に立ち上がり、口縁部には楕円区画が廻らされる。区画と口縁部には円形刺突文が施される。胴部には二条単位の波状文が縦軸に垂下する。地文は集合沈線である。	茶褐色	良好	白色粒
7	土器	縄文時代 中期後半	胴部下半 3/4		11.5		深鉢、三条単位の弧線文が廻らされる。地文は縦方向の集合沈線。内面は被熱のため荒れている。	橙褐色	良好	白色粒
8	土器	縄文時代 中期後半	口縁部				深鉢、内湾する口縁下に沈線間に交互刺突文を廻らし、以下、三条単位の弧線文が廻らされる。地文は縄文である。	橙褐色	良好	輝石
9	土器	縄文時代 中期後半	口縁部				深鉢、内湾する口縁下に沈線間に円形刺突文を廻らし、以下、三条単位の弧線文が廻らされる。地文は摺系文である。	橙褐色	良好	輝石
10	土器	縄文時代 中期後半	口縁部	42.0			浅鉢、口唇部が肥厚し、内湾する。無文。	赤褐色	良好	輝石
11	土器	縄文時代 中期後半	口縁部				深鉢、内湾する口縁下に沈線間に交互刺突文を廻らし、以下、三条単位の弧線文が廻らされ部分的に沈線区画を配する。地文は縄文である。	灰褐色	良好	輝石
12	土器	縄文時代 中期後半	頸部				壺、丸味を有する胴部から短い口縁が立ち上がる。頸部には二条の隆帯が廻り楕状把手が配される。	橙褐色	良好	輝石
13	土器	縄文時代 中期中葉	口縁部				深鉢、口縁下から隆帯による区画文が垂下する。区画内は連続爪形文で充填する。	橙褐色	良好	輝石
14	土器	縄文時代 中期後半	口縁部				深鉢、口縁下に沈線間に交互刺突文を廻らし、小突起部分に沈線文を施す。以下、三条単位の弧線文が廻らされ部分的に沈線区画を配する。地文は摺系文である。	黒褐色	良好	輝石
15	土器	縄文時代 中期後半	口縁部				深鉢、口縁下に沈線間に交互刺突文を廻らし、以下、三条単位の弧線文が廻らされる。地文は摺系文である。	暗茶褐色	良好	輝石、 白色粒

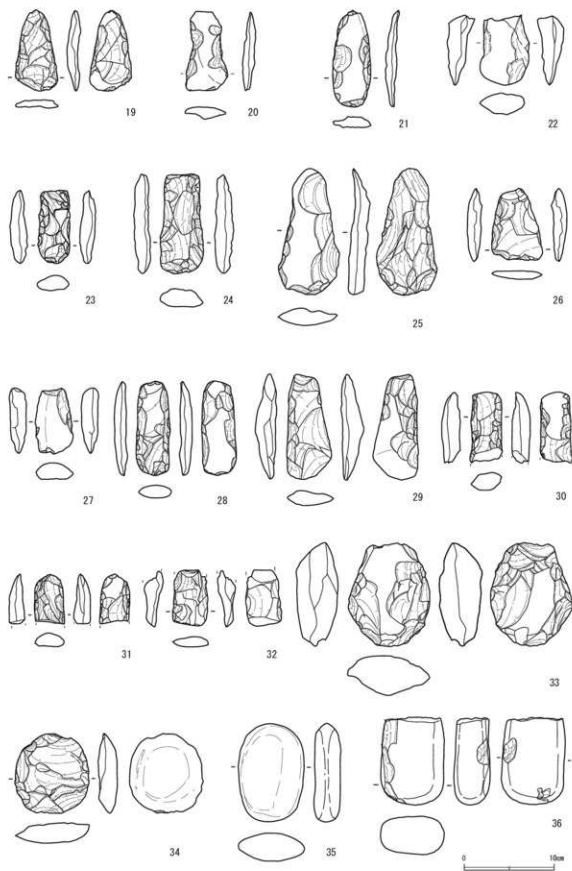
16	土器	縄文時代 中期後半	口縁部					深鉢、口縁下に沈線間に円形刺突文を画らし、以下、三条単位の弦線文が縦に並らされる。地文は黒赤文である。	茶褐色	良好	輝石多量
17	土器	縄文時代 中期後半	底部			0.75		深鉢、網代痕を残す。	橙褐色	良好	白色粒
18	土器	縄文時代 中期後半	底部			0.7		深鉢、網代痕を残す。	橙褐色	良好	石英
遺物 No	遺物大別	遺物類別	遺存状況	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	説	明	石 材	
19	石器	打製石斧	完存	9.1	5.0	1.4	50	撚形、左右非対称		砂岩	
20	石器	打製石斧	完存	8.9	4.7	1.5	65	撚形、左右非対称		粘板岩	
21	石器	打製石斧	完存	10.5	4.3	1.6	82	撚形		粘板岩	
22	石器	打製石斧	刃部 1/2	7.8	5.2	3.0	131	撚形、左右非対称		ホルンフェルス	
23	石器	打製石斧	完存	8.5	3.2	1.85	80	撚形		粘板岩	
24	石器	打製石斧	完存	11.2	5.0	2.2	151	撚形		粘板岩	
25	石器	打製石斧	完存	14.2	7.1	2.1	232	撚形		ホルンフェルス	
26	石器	打製石斧	完存	8.0	5.9	1.2	73	撚形、左右非対称		ホルンフェルス	
27	石器	打製石斧	刃部 1/2	7.2	4.1	1.7	72	撚形		砂岩	
28	石器	打製石斧	完存	10.4	3.9	1.5	75	撚形		砂岩	
29	石器	打製石斧	完存	11.7	5.2	2.1	140	撚形、斜刃		砂岩	
30	石器	打製石斧	頭部 1/2	7.9	3.1	2.0	73	撚形		砂岩	
31	石器	打製石斧	頭部 1/3	5.5	3.5	1.6	45	撚形		粘板岩	
32	石器	打製石斧	頭部 1/4	6.2	4.0	2.2	51	撚形		ホルンフェルス	
33	石器	礫器	完存	12	9.3	4.9	600	円形礫の両面に刃部加工が施される。		ホルンフェルス	
34	石器	礫器	完存	8.8	8.0	2.1	198	円形礫片の方面に刃部加工が施される。		粘板岩	
35	石器	磨石	完存	10.9	7.4	3.6	420	石盤状の楕円形礫を用いる。		閃緑岩	
36	石器	敲石	下部 1/2 残存	9.7	6.9	4.0	575	石盤状の楕円形礫を用い、側面に研磨痕を残す。下側面に敲打痕を残す。		蛇紋岩	

第1図 宮台遺跡周辺の遺跡





第2圖 出土土器



第3圖 出土石器

写 真 图 版

図版 1 (遺構)



西区発掘調査風景



西区発掘調査風景

図版2 (遺構)



包含層

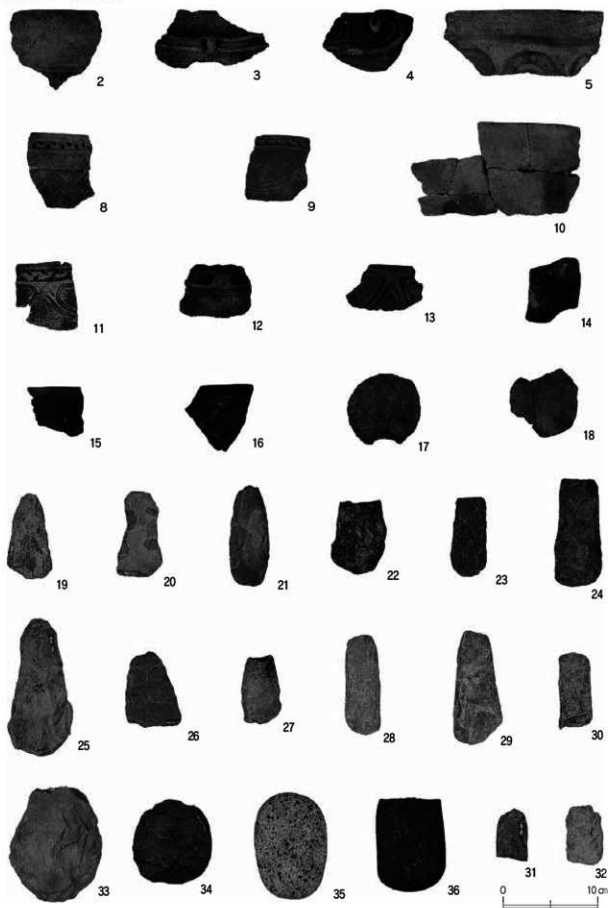


埋 籠

図版3 (遺物)



図版4 (遺物)



報告書抄録

ふりがな	みやだいはいせき							
書名	宮台遺跡(第2次)							
副書名								
シリーズ	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第115集							
編著者名	村松 篤							
編集機関	深谷市教育委員会							
所在地	〒366-0823 深谷市本住町17番地3 Tm.048 (572)9581							
発行日	平成22年3月25日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
宮台遺跡	埼玉県深谷市黒田 下北原 827 番地外	11218	66-40	36° 13' 04"	139° 25' 16"	平成3年10月8日から 平成3年11月11日まで	60㎡	歩道橋 整備
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
	集落	縄文 中期	埋 藏 包含層		土器、石器	集落の一部を調査。埋蔵が出土し が体土器と推定。		
<p>発掘調査の概要</p> <p>縄文時代中期後半を中心とする集落の周辺域の調査報告である。今回の報告により、周辺に隣接する下南原遺跡、上南原下遺跡と遺跡が一体のものとして理解でき、比較的大規模な中期後半の集落であることが推定される。縄文土器は加曾利Ⅰ式中葉のものが主体で、連弧文土器やいわゆる唐草文系土器を主体とする。</p>								

宮台遺跡 (第2次)

平成22年3月25日

編集発行 深谷市教育委員会

深谷市本住町17番地3

